

## 米寿の夢

2022-8-25 野口幹夫

その夢というのは、高津の2年になったときに持ち始めました。だから70年持ち続けていることになります。この夢は長い間 半ば暗い闇に覆われていたのですが、米寿になった今、今までとは違うようやく明るい展望が生まれてきて、「米寿の夢」らしくなってきたのです。取りようによっては、シリアスな話題かもしれませんが、所詮は「夢物語」笑い話として聞いてください。

高津高に入学した私は1年から新聞部に入っていました。中学からの続きで新聞づくりが好きだったからです。2年になった時、新たに村尾行一君が入部してきました。彼はある意図をもって入部してきたのです。それは高津新聞を高津高自治会の機関紙にしようと考えて来たのです。私はそのようなことには無頓着でした。しかし新聞は変わり始めました。

村尾君は一足先をいっていました。彼からこの世が資本主義であり、やがて人民の蜂起で社会主義の世界に替わると教えてくれました。資本主義の世界にいる限り民衆は、金のために働くだけで、幸せにはならない。その交替を求める民衆運動に参加し、支援しなければならぬと理解しました。高津の自治会もそしてその機関紙である高津新聞もその方向に歩まなければならないのです。

そんなある日、私は彼と高津の教室を抜け出して、京大に行きました。ちょうどその日は昭和天皇が京大を訪問する日で、学生たちが平和運動の歌声で天皇の到着を待ち構えたのです。

それを見た記事を書き、高津新聞に掲載したのです。新聞はすぐ抑えられて校外に出すことを禁止されました。しかし高津の先生方も理解がありました。書いた私には何の咎めもなかったのもので、いい青春の記憶の一コマで終わりました。その後も高津新聞は警察予備隊の創設に批判し再軍備反対のキャンペーンを張りました。高校の新聞としては異例でした。

阪大を卒業して東芝に就職するころ、生涯で一度だけ私が父に逆らったことがあります。父から東芝で「せいぜい出世しなはれ」と言ってくれたのに、自分は「出世するために会社に入るのではない、そこで社会を変えていくために働きます」と答えたのです。父はむっとしてそれ以上言いませんでした。私はそのつもりでいました。しかし実際のところは父の言うとおりになったのですが。

東芝に入ってから本業はカラーブラウン管の事業育成に従事。そのあとは東芝の電子部門の競争力強化に働きました。社会を変えていきたい仕事は二つやりました。入社間もない頃、結核闘病の2年を卒業した後のことですが、本社工場で起きた臨時工解雇反対運動の支援です。ある日そのための謄写版印刷のビラをつくりました。その日課長からよばれ、「このビラはお前の筆跡だろう」とやられました。丸見えです。

姫路太子工場でカーブラウン管工場の全責任を任せられた時です。1600人の3交替の大工場です。ここで日夜3交替で働く人たちのことを考えました。ベルトコンベアで目の前を進むブラウン管半製品のどこかに何かを加工していただくだけの単純労働です。

まず私はこの職場の機関紙を作りました。新聞づくりは慣れたものですから。

「ブ管ジャーナル」と名付け全員に配布することにしました。ここで働く人たちの写真を労働英雄のように掲載しました。一人一人は単純作業ですが、それが重ね合わさって初めて超精密なカラーブラウン管に仕上がっていくのだということを理解してもらおうとしました。そして1年かけて幹部から始め最後はすべての作業員も参加して「我々の仕事が世界のカラーテレビに供給される。いい品質を作

りこむ、職場に創意工夫を働かせる」といった趣旨の「ブ管綱領」を作ったのです。こんなことは広い世間でも初めて終わりでしょう。この討議と作成にいたる集会は、休日を利用したりしておこなわれ、皆さんがまじめにその意味を歓迎してくれました。そのせいでこの工場はある戦闘集団になり、いい品質の多品種カラーブラウン管を量産しつづけ、結果としては世界トップのカラーブラウン管工場になったのです。私は1600名もの労働者諸氏が、量産工場の単純労働の繰り返して人間性を失うことなく、全員の連携作業で完成されるカラーブラウン管という超精密作品に参加しているという意識を持ってもらい、人間らしい労働の



意味を、実現することができたと思います。今になって振り返ってみた時 当時は意識しませんでした。社会主義下で実現する「労働の人間性獲得」を、あの場で実験をしていたのだと、今になって、その意味を感じています。

このような職場もやがて液晶テレビの時代が来て終焉します。

そのあとの私の夢は、世界の社会主義運動を見守ることだけになってしまいました。

時計を戻して私の25歳ころ、結核闘病時代に戻りますが、病院での楽しみは「人民中国」というグラビア雑誌を買って読むことでした。当時中国は毛沢東の大躍進政策にさなかで、美化された労働英雄の物語であふれていました。社会主義の国を作る人民の喜びを伝えようとしていたのです。後世になってわかったことですが、この大躍進政策は大失敗に終わり、さらにその失敗の上塗りである文化大革命の悲劇へのつながっていったのです。当時は希望に満ちた情報しか掲載されていませんので、わかりませんでした。

社会主義が実現できるためには、資本主義の時代を経ることによって、人間の生産性が高まり、すべての人民の生活資源が生み出せていることが前提になるのですが、ソ連にせよ 中国もそれを満たすことなく、農業国の遅れた社会から、一挙に社会主義化を進めようとするのですから、いくら前衛党の権力のもとでも うまくいくはずがありません。その後鄧小平の下で中国は社会主義でなく資本主義の体制に入ります。それは成功し中国は一挙に生産力技術力で世界トップレベルに這い上がりました。

このころ村尾氏にこの中国をどう思うかと聞きました。彼は「今や中国は国家資本主義の国

になった」と答えました。私はそうには違いないけれど、資本主義の過程を経なければ生産力の爆発的成長は起きないから、社会主義建設のための必要悪の過程だろう。社会主義国の建設という目的を中国は失っていないのだから、その限りでは目的達成のための必要悪はやむを得ない。大多数の人民が支持をする限り、少数の反体制派を抑圧することも やむを得ないことだと思っていました。希望をもって中国の社会主義社会の建設を見守っていきたいと考えていました。

歴史はさかのぼりますが、世界の資本主義先進国の一つで起きた社会主義運動に国民社会主義を名乗った有名な政党がありました、Nationalsozialismus ナショナルソシアリズム すなわち国民社会主義 略称ナチスです。

その総統ヒトラーは、その登場の時は社会主義国家建設を目指

し、国民を熱烈ファンにしたのです。今も残るフォルクスワーゲ



ンやアウトバーン網など、指導者の独裁が成功していた時代の遺産です。しかし結果は周辺の民族のみならずドイツ国民をも悲劇のどん底に落としてしまいました。悪例の極みですね。

ところで多くの皆様の中では「社会主義」と聞くと、危険なマイナスのイメージを持たれる方が多いのではないのでしょうか。それはここに述べましたように、中身はおぼろげだが、これまで、その実現への道が「闘争的」で暴力的であったり、人権を抑圧するイメージが先行するので、極端なら「反共主義」 そうでなくとも、なんとなく避けていきたいような怖いイメージが付きまとっているのです。

しかし「社会主義」という言葉がこの世に生まれたときは、人間社会が目指す「ユートピア」として生まれたのです。それは18世紀に産業革命が起き、資本主義が勃興し始め、労働者の過酷な労働と悲惨な生活がもう始まっていたイギリスで生まれたのでした。生みの親はロバート・オウエンという成功した実業家でした。墮落していた教会キリスト教とは距離を置きながら、キリストイエスの愛の教えをこの世に実現しようとししました。彼は労働者が平等に参加する組合型の生産システムを生活の基盤とし、それに参加する者の心からの寄与を実現するための「訓練学校」を中心におきました。参加全員の共同生活のための快適な住居を

つくりました。そのようなコロニーを、まずイギリスで、そのあとアメリカでも実験的に作ったのです。大統領や国王などの要人も見学に訪れました。そしてあのマ



ルクスもこれを見て学びました。のちにエンゲルスがユートピア社会主義と皮肉な名称を与えたのですが。

このオウエンの試みは「協同組合思想」として世界中につたえられ発展していきました。

スペイン北部バスク地方のモンドラゴン生産者協同組合、イギリスの植民支配者が持ち込んで、独立後の国づくりの中心に協同組合がある「アフリカ社会主義国ケニア」は特別な例ですが、今もアメリカでもわが国にも生き続けています。

しかしその後の2世紀の間、世界を支配した欲望の資本主義、自由主義グローバリズムが支

配する中では、協同組合は日陰の存在となりました。しかし生きていたのです。

その活力が今蘇ろうとしています。その原因がなんと「地球温暖化」の危機の到来です。

今や世界中の人々の日常の生活にも危機感を覚えるようになった地球温暖化の対策は待ったなしです。その根本原因が「経済成長」を求めつづける「欲望の資本主義」にあることが誰の目にもはっきりしたのです。不意に人間に襲い掛かったコロナで、一時的に成長を止められたら、その年の二酸化炭素の排出が一時的に減少しました。こんなことはかつてないことでした。経済成長なくしては生き続けられない「資本主義」を抑え込み、そのオルタナブルとして次に来るべき主役「社会主義」が見えてきたのです。これまで人類が経験した無理強い道でなく、ナチュラルで民主主義的で平和な方法で。

私にとって、そのはじめの希望の情報は 2020 年のアメリカの大統領選挙でした。トランプが負けて議事堂にトランプ支持者の乱入事件のあったあの時です。国際政治学者の高橋和夫氏の本で、この選挙で最もアメリカの政治情勢を動かしたのは、バイデンではなく、バイデンに道を譲ったサンダースだと書いていました。ここから始めてアメリカに今若者を動かしているサンダースチルドレンたち、例えば有名な女性アレクサンドリア・オカシオ＝コルテス（AOC と略称）の史上最年少下院議員の登場の物語実話を



知りました。彼女はアメリカの貧困層の出身で、その草の根運動で 有力だった金権政治家を打ち負かしたことを知りました。AOCさんは、アメリカ民主社会主義協会 DSA の会員で、その党憲章にこう書いてあるのです。

「我々は社会主義者である。我々は理想を実現する為、アメリカで民主的な社会主義を現実化することを目指している」

アメリカにこんな協会が存在することに驚きましたし、その協会員が選挙に勝って下院議員になった社会状況が、あのアメリカで生まれているのです。信じられないことでした。

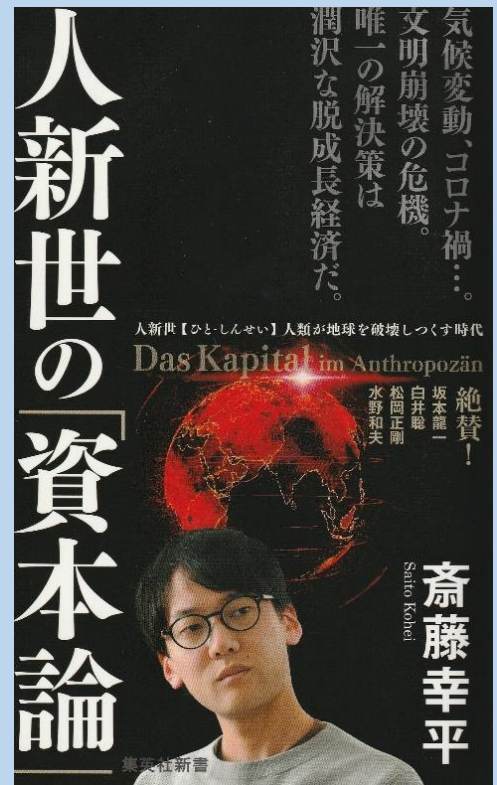
そういえば それに先立つ2011年には「ウォールストリートを占拠せよ"We are the 99%"運動」が起きていたのです。これは平和裏に終わりましたが、アメリカの民衆の力がある発火点の近づいていることに気付かされた事件でした。

彼ら DSA は今グリーンニューディールと名付けられた社会主義的政策を発表し地球環境対策を具体化しています。その経済的裏付け理論が、今世界的の注目されているMMT（現代貨幣理論）なのだとしりました。本流の経済学者は無視しますが、実は今の日本が巨額の財政赤字を抱えながらも、破綻しない理由が実はこの MMTの無意識の実践にあるらしいこともしりました。今回はここにはこれ以上踏み込みません。ただそのようなつながりがあることだけはお伝えします。

アメリカ以外では歴史的に協同組合が強いスペイン第2の都市バロセロナは 市として気



候非常事態宣言を出し、経済システムの変革に乗り出しました。バロセロナ単独でなく国境を越えて同じ目標を掲げ連帯する都市があり、それらは「フィアレスシティ（恐れ知らずの都市）」と呼ばれ、アムステルダムやパリ、グルノーブルなど横に連帯することができ始めているのです。その活動を今ベストセラーになった『人新世の「資本論」』で斎藤幸平氏が詳しく紹介しています。



日本は遅れています、性懲りもなく「新しい資本主義」

を看板にしている国です。地球温暖化対策も化石国家と判定されるほど遅れています。

私も遅れています。米寿になる今、やっと恐れることなく DSA のようにこう宣言します。

「私は社会主義者です。民主主義的手段で資本主義を一日も早く終焉させるための運動を支援します。そして地球環境破壊を食い止める運動を自分でも実践するとともに、その趣旨のあらゆる運動を支援します。」

以上